

# ダルクにおける「回復」の社会学的検討Ⅱ（４）

## —薬物依存者における「回復」調査の困難と日記—

成城大学 南 保輔

### 1 目的

「回復」は、薬物依存者にとっての目標であると同時に実践のプロセスでもある。まとまりある「現象」として経験的研究の対象とするのは困難なものだ。われわれ調査チームはパネルインタビューを主要調査法としてこれにアプローチしてきたが、日記法と対比しつつ方法上の検討を行う。

### 2 方法

大都市圏に位置する2つのダルク利用者9人のパネルインタビュー記録とそのうち1人の日記から、「回復」に関わる語りや記述の事例を抽出し、分析した。

### 3 結果

「回復」をめざす薬物依存者のバイブル『ナルコティクスアノニマス』においては、薬物を使わない（でいる）ことが「回復」にとって必須であるが、それだけではないし、それ以上ではないという、かなりわかりにくい記述が見られた。

パネルインタビュー記録からは、調査協力者たちの「回復」度や「回復」観が、インタビュー時点での状況に応じて変動している様子がうかがえた。たとえば、Bさんは、初めて「クリーン（断薬）」1年のバースデーを迎えて、多くのひとがお祝いに集まってくれた直後のインタビューでは、その後も「回復」が続いていくことに自信を示していた。だが、かつて交際していた女性から誘いを受けているなかでは、いつ再使用してもおかしくないと感じていた。また、使用前の身体・精神状態には決して戻れないということから「回復」は一生ないということもあったが、やめ続けることはできると言うことのほうが多かった。

社会調査法のひとつとして日記を位置づけることができる。日記法の教科書であるアラシェフスカ（2006=2011）には、①定期性、②個人性、③同時性、④記録物性、の4つが日記の特徴として挙げられている。録音しながら行われるパネルインタビューでも、①定期性、③同時性、④記録物性は、ある程度充足される。だが、記録の「定期性」に大きな違いがある。パネルインタビューが1ヶ月から2ヶ月間隔であったのに対して、日記はほぼ毎日書かれるものだからだ。「同時性」の水準もこの違いを反映している。日記ではほぼ24時間以内に「記録物」となる一方、パネルインタビューでは「出来事」の生起から記録されるまでが1ヶ月半以上空くことも珍しくない。

Bさんの日記では、あるミーティング会場に到着して着席したとたんに、強い薬物使用欲求がなくなったという経験がその日のうちに記録されていた。これは、その後何度もBさんが繰り返して語るエピソードとなったが、生起により近い時点でのより「ありのまま」の記録が日記に見いだせる。もちろん、生起と記録の間隔が短いというだけで「真理性」の水準が高いと考えるべきではない。なにを記録するかという「選択性」は、自己報告である、日記にもインタビューにも見られるものなのだから。

### 4 結論

薬物依存者の「回復」は、生活を共にしているわけではない調査者にとって観察不可能である。パネルインタビューに日記を併用することで、この困難はかなりの程度克服することができる。

### 文献

アンディ・アラシェフスカ. 2006=2011. 『日記とはなにか：質的研究への応用』川浦 康至；田中 敦訳. 誠信書房.